教職課程教育におけるキャリア支援の試み
—「奈良大学教職学習会」の活動を通して—

教養部　教職担当　**中　戸　義　雄**

1　はじめに

教職課程教育の第一の目的は教員を養成することである。しかしながら、教員養成学部ではない一般大学の教職課程の場合、教職に就くことを一義的な目的としない学生も多い。彼らの場合、多くは資格取得という目的で、あるいは保護者からの勧めなどによって受講している。こういった教員志望ではない学生をも対象とした教職課程教育の意義については、私が担当する教職課程の授業実践を検討することで、「大人学としての可能性」について指摘したことがある[1]。

とくに奈良大学（以下本学）の場合、その規模に比して教職課程履修者数が多い。教員養成学部をもたない一般大学の場合、教員免許を取得する割合は10%程度であるが、本学では多い年では20%を越える学生が教員免許を取得している。そのことの是非については一つの検討課題であるが、とりわけ問題なのは教員を目指す学生がかえって少数派となりかねないということである（本学の場合、例年免許取得者が100人前後であるのに対して、教員採用試験を受けるのは30人程度である）。そこで本稿では、教職を目指す学生たちへの授業外でのキャリア支援と位置づけられる「奈良大学教職学習会」の活動を振り返り、今後の課題についても検討していきたい。

2　教職学習会始動

（1）第1期学習会

2004年11月、教職課程の授業を受講する3年次の学生が2人、私の研究室を訪ねてきた。彼らがやって来た目的は、自分たちは来年教員採用試験を受ける予定で、個別に学習は進めているが、それだけでは不安もあるので力を貸してほしいという相談であった。私はこの年の4月に本学に着任し、初めて担当する授業も多くあり、その準備や新しい環境に適応することなどで時間的・体力的にも決して楽とはいえない状況にあった。しかしまた同時に、教職課程担当者として、教職志望者に対して授業以外でのサポートができないかと考えていたのも事実である。本学の教職課程では、私が着任する数年以上前から公立中高

校の採用試験合格者は現役では出ていないという、教職志望者にとっては厳しい現実があった。そこで彼らに、サポートの具体的内容については今後検討するが、可能な範囲での協力は行うことを約束した。そして、後期試験を終えた年明けから「教職学習会」をスタートさせることとし、私は授業などを通して呼びかけるので、彼らには採用試験を受ける他の学生へもこの学習会に参加を促すように依頼した。第1期学習会の日程は以下の通りである（なお、以下にあげる各期の日程表には、教育実習以前に実施された学習会のみを表示した。カッコ内はディスカッションのテーマを表す）。

学習会日程（2005/1/31 ～）

回　数	日　付	学習会内容・ディスカッションテーマ
第1回	1月31日	学習会趣旨説明・各自の自己プレゼンテーション
第2回	2月14日	「インターネットの特性を生かした指導について」
第3回	2月21日	「不登校」
第4回	2月28日	「習熟度別授業」
第5回	3月 7日	「いじめ問題」
第6回	3月14日	「国語力」
第7回	3月22日	「小学校への英語導入について」
第8回	3月28日	「ゆとり教育」
第9回	4月 4日	「国歌・国旗について」
第10回	4月16日	「学校の安全管理」
第11回	5月 7日	「子どもの体力低下の原因」
第12回	5月14日	「教師像について」

第1回目の学習会は2005年1月31日に開催。会場である教養部共同研究室に集まった学生は15名。私が担当したこの学年の授業は社会科教育関連科目だけであったことも影響してか、史学科、地理学科、文化財学科の学生はいたが、中高国語の免許取得が可能な国文学科、高校情報の免許を取得可能な現代社会学科（2010年度より社会調査学科に改組）の学生は皆無であった（ただし、情報での採用者数が極めて少数であるため、現代社会学科の履修生は毎年数人程度）。

学習会は教育に関するテーマのディスカッションを教育実習に入る5月ごろまで行い、

実習を終えて筆記試験を中心とする一次試験の後、二次試験実施の前にそれぞれの受験予定府県に沿った対応を考えるという方針の説明を行う。その後、教職志望の理由を含む自己プレゼンテーションを各自3分程度行い、それぞれのプレゼンに対して私がコメントを出して1回目は終了した。ところで、2回目以降の学習会をなぜディスカッション中心としたか。それには次のような理由を挙げることができる。

①ディスカッションを通して自分の考えを相手に伝え、相手の考えを受けとめるというコミュニケーション能力の向上をはかること。
②教員を目指すにあたって教育に関する知見を広げること。
③上記のことを通して教員採用試験の際に実施される個人・集団面接、集団討論、小論文などへの対応力をつけること。

採用試験に直結するのは③といえるが、将来教員となった場合に生徒や他の同僚、そして保護者など多くの人たちとコミュニケーションをとる立場になる彼らにとって、とりわけ①が重要だと考えたからである。具体的な方法としては、各回の担当者が『最新教育キーワード』(時事通信出版局)に掲載されているキーワードなどを参考にしながら、自分の関心のあるテーマを設定する。そして、A4用紙2～3枚程度のレジュメを作成し、それをもとに担当者が20分程度内容説明・議題提案を行い、出席者全員でそのテーマについてのディスカッションを行うという形式であった。最初は思いつきの意見やたんなる感想も多く、話がかみ合わずに沈黙が長く続くことも稀ではなかった。一方で私は、自分の発言が「正しい答」と受け取られたり、議論の妨げになることを避けるため、途中で口を挟むことをできるだけ避けていた。

その後、司会者を決め、反対にせよ賛成にせよ、他者の意見にかかわらせる形で自分の考えを述べるように促していくと、回数を重ねるうちにお互いの距離が縮まって来たこととも相まって、少しずつ議論が進むようになってきた。早急に何らかの結論を出すことが重要なのではなく、他者の見解に触れることで視野を広げ、それぞれのテーマに対する認識を深めていくきっかけとなることがディスカッションの目的でもある。時間的には通常90分前後、テーマによっては2時間を越えることもあった。ディスカッション後は教職教養を中心としたミニテストを担当者を決めて出題し合い、答え合わせをしながら確認する時間を20～30分程度設定し、学習会全体では毎回2時間強であった。

日程表にもあるように、教育実習期間が始まる５月半ばで学習会は一旦休止し、一次試験後の二次試験へ向けた再開を約束した。しかし、結果的に学習会メンバーに一次合格者は出ず、11 月に学習会総括を行い、懇親会などその後メンバーが集まる機会は散発的にあったものの実質的な活動は終了。

第１期メンバーの進路は、小学校講師（臨時免許状によるもの）、塾講師（正職員）、小学校などの教員免許取得のため他大学（通信課程）進学、一般企業への就職などであった。

（２）第２期学習会

学習会日程（2006/1/21 ～）

回　数	日　付	学習会内容・ディスカッションテーマ
第１回	1月21日	各自の自己プレゼンテーション
第２回	1月25日	「フィンランドの教育制度」
第３回	2月 8日	「いじめ」
第４回	2月13日	「教育への民間参入について」
第５回	2月20日	「フリーターとニート」
第６回	2月27日	「総合的な学習の時間」
第７回	3月13日	「小中高における奉仕活動について」
第８回	3月27日	「ダブルスクール現象」
第９回	4月 3日	「学級崩壊について」
第10回	4月15日	「インターナショナル・スクール」
第11回	4月22日	「生きる力について」
第12回	5月 6日	「日の丸、君が代について」
第13回	5月13日	学習指導案相互批評

第２期の学習会第１回は１月 21 日に開催。集まった学生は 14 名。この学年からは教職を履修する全学生が私の担当授業を受講するためか、出身学科も受講者数がごく少数である現代社会学科を除く文学部の全４学科の学生がそろった。学習会開始のアナウンスは私の担当授業を中心に実施した。第２期の学習会は基本的に第１期のスタイルを踏襲し、初回に各自のプレゼンテーションを行い、その後ディスカッションを重ねる形となった。だが、教育実習が近づくにつれて学習会メンバーから実習授業への不安の声が大きくなって

きた。模擬授業など授業実施への準備は「教育実習指導」等の実習授業や各個人での対応を促していたが、せっかく実習予定者が集まっているのだから、せめて準備をしている学習指導案を持ち寄って相互に検討しようということになり、日程表にある第13回目の内容となったのである。

また、学習会の中盤頃にはこんなことがあった。ある一人のメンバーが私に「個人的な話しがある」というので聞いてみると、以下のような内容を伝えてきた。学習会と並行して行っていた就職活動で希望する企業から採用予定の知らせをもらい、教員採用試験を受けずにそこに就職をしようと考えている。ただ、学習会とくにディスカッションへの参加は継続したいが、他のメンバーのモティベーションに悪い影響を与えては申し訳ないので、当面はそのことを公表しないで参加し続けたいとのことであった。もちろん、教員への道がすべてと考えているわけではないので許可をしたが、ディスカッションのもつ意味の大きさを実感させられた出来事であった。

第2期も残念ながら一次試験合格者は出なかった。ただし、メンバーの中から2人が教育学系、教科専門系の大学院への進学を目指すことになり、その時点で彼女たちに十分な学力があるとは言い難い状態であったので、外国語（英語）と教育学系科目の指導を夏期休業期間から年明けの受験期に至るまで継続的に行った。

第2期メンバーの進路は公立高校講師、塾講師（正職員）、大学院進学（教育学系、歴史学系）、一般企業への就職などであった。

3　学習会活動の活発化

（1）第3期学習会

学習会日程（2006/12/16 ～）

回　数	日　付	学習会内容・ディスカッションテーマ
第1回	12月16日	自己プレゼンテーション
第2回	1月13日	「2学期制について」
第3回	2月14日	「給食・食育について」
第4回	2月19日	「ゆとり教育について」
第5回	2月26日	「心の教育について」
第6回	3月　5日	「中高一貫教育について」
第7回	3月12日	「しつけについて」

第8回	3月17日	「居場所について」
第9回	3月19日	『国語教科書の思想』を読む(1)
第10回	3月26日	「夜間中学について」
第11回	4月 4日	『国語教科書の思想』を読む(2)
第12回	4月14日	模擬授業　3名
第13回	4月21日	模擬授業　3名
第14回	5月 7日	模擬授業　3名
第15回	5月12日	模擬授業　3名
第16回	5月17日	模擬授業　3名
第17回	5月19日	「学力テストについて」

第3期の学習会は第2期までと比べて多くの点で変化がみられ、それ以降に続く学習会の基本的なモデルとなった学年といえるだろう。学習会開始のアナウンスは私が担当授業で行うと同時に、それだけでは不十分とも考えられたので、就職課（現キャリアセンター）の応援を得て、事前に説明会を開催し、告知ポスターも作って掲示してもらうことになった。第1回目の学習会は12月16日に開催。集まった学生は9名であった。事前の準備にもかかわらずこれまでよりも少ない人数でのスタートとなったが、2回目以降は参加人数が増えて例年並みとなった。この第3期ではいくつかの新しい試みが取り入れられ、活動が活発化していく。

まず一つ目は第1回の時期・内容である。これまでは年明け、後期試験後のスタートであったが、それを約一ヶ月前倒しで実施することで冬休み以降の学習への奮起を促した。そして、これまで3分間であった自己プレゼンテーションを1分間に短縮した。これは実際の採用試験で自己プレゼンの際に3分の時間が与えられることはほぼ皆無であり、多くは1分、府県によっては30秒しかないという現実に対応させるためである。また、この回には在学中の2期生や近隣に住んでいた既卒の1期生からも参加があり（計7名）、3期生のプレゼンに対して自分たちの経験を生かしたコメントを出してくれていた。

そして二つ目は、これまで実施してこなかった模擬授業を本格的に学習会活動として取り入れたことである。前項でも述べたように、授業実施への準備については実習授業や各個人での対応を促していたが、実際の授業形式に沿った形での準備が不十分であり、実践力を向上させるためにも模擬授業を行うこととなった。その期間を確保するためディスカッ

ションを中心とした学習会を3月末までにほぼ終了させ、新年度となる4月以降は主として模擬授業に当てた。模擬授業は各自が準備した学習指導案に基づき、実習予定範囲の授業を行う。実際の授業は50分であることが多いが、30～40人の生徒を相手にする実際の授業との人数の違いなども考慮して模擬授業では45分とする。他のメンバーは生徒役として参加し、授業後に授業者と意見交換を行う。これは15分程度の予定であったが、さまざまな意見が交わされ30分を越えることも多かった。模擬授業の後半頃には、放送研究会に所属するメンバーがサークルのビデオ機材を持ち込み、模擬授業の様子を撮影し、ビデオにして本人があとから映像を見ることができるようにしてくれたこともあった。

三つ目は読書会。テーマを各自が設定するディスカッションも重要だが、同じテキストを読み、その内容や疑問点について議論することは面白く、また意味があると彼らに話したことがあった。それを学習会に取り入れようとしたのが、番外編ともいえる第9回目と第11回目に示されている内容。国語教育のみならず、教育全般にも関わる内容ともいえるということで石原千秋『国語教科書の思想』（ちくま新書）を取り上げた。

今回はじめて一次試験合格者（兵庫県中学社会）が出た。ただし、その後の対応は時期的な問題もあって学習会としては不十分なままに終わり、結果的に二次試験の突破は適わなかった。また、大阪府の高校地理歴史を受験した学生が、受験者115人中6位の成績であったにもかかわらず、一次試験さえ合格しない（一次通過は5位まで）という厳しい現実にも直面した（ただし、このメンバーはその後2年間の非常勤講師を経て採用試験に合格し、現在は大阪府立高校で日本史担当教員として勤務している）。

第3期メンバーの進路は、公立中学・高校講師、私立高校講師、塾講師（正職員）、他大学教員養成学部への編入学、一般企業への就職など。この3期生は特に結束力が強く、第4期学習会への参加はもとより、卒業の際には自分たちで学習会の「卒業記念DVD」などの作成も行っていた。

（2）第4期学習会

学習会日程（2007/12/22～）

回　数	日　付	学習会内容・ディスカッションテーマ
第1回	12月22日	各自の自己プレゼンテーション
第2回	1月12日	「薬物汚染」
第3回	2月　8日	「夜スペシャル―杉並区立和田中学校の取り組み―」

第4回	2月15日	「活字離れについて」
第5回	2月22日	「デジタルデバイド」
第6回	2月29日	「学校選択制について」
第7回	3月12日	「児童虐待について」
第8回	3月24日	「習熟度別学習について」
第9回	3月31日	「生きる力」
第10回	4月12日	「魅力ある授業とは」
第11回	4月19日	「食育について」
第12回	4月26日	模擬授業　3名
第13回	5月10日	模擬授業　3名
第14回	5月17日	模擬授業　3名
第15回	5月24日	模擬授業　2名
第16回	8月28日	模擬授業　1名

第4期第1回目の学習会は12月22日に開催。当日の参加者は19名であり、各自1分間のプレゼンではあったが、それぞれに対して先輩たちからのアドバイスや指摘があったので長時間に及ぶことになった。学習会の活動内容は第3期のスタイルをほぼ踏襲し、合計10回のディスカッションの後、模擬授業へと移行した。第16回が夏休み期間に実施されているのは秋からの後期期間に教育実習を行うメンバーがいたためである。

第3期に続き一次試験合格者（群馬県中学国語）が出たが、二次試験突破はならず。ただし4期生は採用試験終了後も、卒業までの期間、読書会（姜尚中『悩む力』集英社新書など）や模擬授業を繰り返し、教員としての能力向上に努めていた。採用試験後の活動に関しては、仕事上の都合もあり、私が関与する割合は結果的に少なかったが、そういった点からみて4期生は自主性を十分に発揮していたといえるだろう。

第4期メンバーの進路は、公立中学・高校講師、塾講師（正職員）、大学院進学（教育学系）など。

4　学習会活動の結実

（1）第5期学習会

学習会日程（2008/12/20～）

回　数	日　付	学習会内容・ディスカッションテーマ
第1回	12月20日	各自の自己プレゼンテーション
第2回	1月10日	「ケータイ校内禁止令」
第3回	2月　9日	「ゆとり教育と詰め込み教育」
第4回	2月16日	「いのちの教育について」
第5回	2月23日	「部活動について」
第6回	3月　2日	「ゼロトレランスという生徒指導法」
第7回	3月11日	「個性重視の教育」
第8回	3月17日	「伝統と文化に関する教育について」
第9回	3月26日	模擬授業　3名
第10回	4月　6日	模擬授業　3名
第11回	4月13日	模擬授業　2名
第12回	4月25日	模擬授業　2名
第13回	4月27日	模擬授業　2名
第14回	5月　9日	模擬授業　2名
第15回	5月16日	模擬授業　2名

第5期第1回目の学習会は12月20日に開催。17人が参加。これまでよりディスカッションの回数を減らし、全体の半分の7回を模擬授業に当てた内容となった。また、模擬授業の様子を本人が視聴できるように、ビデオカメラを研究費で購入し、日程表にあるすべての模擬授業を収録した。その後にDVD化して各人に渡し、自分でその映像をチェックするように指示をした。模擬授業実施後に行う生徒役の参加メンバーとの意見交換も、その後の授業改善には大きな意味をもつが、実際に自分の目で確かめることでしか解らない部分も多いからである。

自分の模擬授業映像を見たメンバーからは異口同音に「45分間がすごく苦痛だった」「自分の姿から何度も目を逸らしてしまった」といった感想が返ってきた。私自身、大学授業研究の一環として自分が行った授業の映像を見たことがあるので彼らの気持ちは非常によ

くわかる。しかし、「その自分の授業を、実習先の生徒に受けてもらうわけやろ。まして採用後は自分の担当する生徒に一年を通して受けてもらうことになるんやから、いやでも自分でそれを直視する責任はあるはず」と言うと彼らは黙って苦笑してしまうのだが…。

この年は2名が一次試験を通過。同じ時期に採用試験を受ける学習会の既卒メンバーも参加し、面接や集団討論の練習を教育実習後の6月から7月にかけて繰り返した。その結果、現役メンバーが群馬県高校地理歴史、愛知県中学社会の二次試験を突破し、学習会初の現役合格を果たした。とくに群馬県の採用試験に通ったメンバーの場合、彼は第2回の学習会で携帯電話をテーマに取り上げたが、それがまさに採用試験の集団討論・面接において出題され、学習会での議論も踏まえながら自信を持って望むことができたとのことであった。

第5期メンバーの進路は、公立中学・高校教諭、小学校児童支援講師、公立中学・高校講師、私立高校講師、大学院進学（教育学系）、博物館職員など。

（2）第6期学習会

学習会日程（2009/12/19 ～）

回　数	日　付	学習会内容・ディスカッションテーマ
第1回	12月19日	各自の自己プレゼンテーション（1）
第2回	2月 1日	各自の自己プレゼンテーション（2）
第3回	2月 8日	「公立学校の無償化について」
第4回	2月15日	「愛国心教育と社会科必修問題」
第5回	2月22日	「子どもの体力・運動能力低下について」
第6回	3月 1日	「飲酒等の問題行動に対する指導について」
第7回	3月 8日	「学校現場でのいじめに対する指導について」
第8回	3月15日	「情報モラル教育について」
第9回	3月22日	「総合的な学習の時間のあり方と現状について」
第10回	4月10日	模擬授業　4名
第11回	4月17日	模擬授業　3名
第12回	4月24日	模擬授業　3名
第13回	5月 8日	模擬授業　3名
第14回	5月15日	模擬授業　3名
第15回	5月22日	模擬授業　3名

第6期第1回目の学習会は12月19日に開催。ただしこの時は参加者が30人を越え、プレゼンテーションを2回に分けることになった。そのため模擬授業期間も長く確保する必要があり、結果的にディスカッションの回数を十分に重ねることが困難であった。

また、この年の5月から教養部に「資格資料室」が設置された。これは教職資格と司書資格との合同で、関連資料を集め、さらには学生の自主的な学習の場としても資する目的で設置されたものである。教養部教員の理解の下、そして学生支援センター（教務担当）の協力も得ながら、学習環境の整備という以前からの要望が一つ実現されることになった。採用試験に向けての学習をはじめとする教職課程履修学生の学びの支援の一助となりつつあり、とくに学習会メンバーは採用試験後もこの資料室で自主的な読書会を繰り返し実施していた。

教養部「資格資料室」

この年は4名が一次試験を通過。前年同様、個人面接や集団討論の練習を重ねた。残念ながら全員合格とはならなかったが、このうち2名が京都府中学国語、奈良県中学国語の二次試験を突破し、前年度に引き続き現役メンバーが合格を果たした。

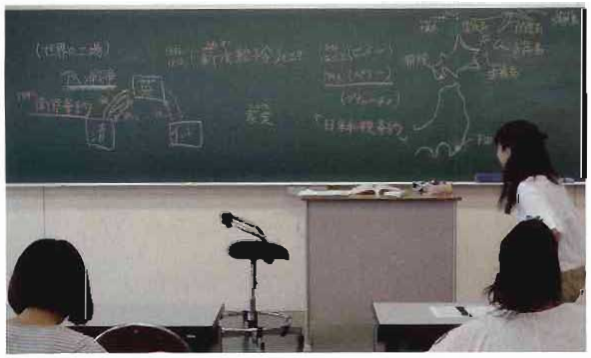
第6期メンバーの進路は、公立中学教諭、私立中学・高校講師、大学院進学（教育学系）、一般企業への就職など。

ここで一つ書き記しておきたいことがある。昨年の2月に第6期メンバーの一人から「折り入って話がある」と連絡があった。がんが見つかり、進行性のものであるという。治療のために休学を決め、その後一時は模擬授業に顔を出せる程の小康状態を保った。周囲も回復への期待を持ち続けていたが、夏以降に体調を崩し、12月には帰らぬ人となってしまった。彼は大変個性豊かで、教師に適した資質を備えている人物であった。闘病の最中も希望を失ってはいなかったが、体調が悪化した際にふと「教師になりたかったなあ」という言葉を漏らしたという。学習会メンバーにとっても私にとっても悔しく辛い経験であった。

5　今後の課題と展望

学習会日程（2010/12/18 ～）

回　数	日　付	学習会内容・ディスカッションテーマ
第1回	12月18日	各自の自己プレゼンテーション
第2回	2月　1日	「支援の必要な生徒について」
第3回	2月　8日	「いじめについて」
第4回	2月14日	「学校と親」
第5回	2月21日	「学校選択制」
第6回	2月28日	「ゼロトレランスについて」
第7回	3月　7日	「学級崩壊」
第8回	3月14日	「道徳教育について」
第9回	3月22日	「同和問題について」
第10回	3月25日	模擬授業　3名
第11回	3月28日	模擬授業　2名



「高校日本史」模擬授業

昨年の12月からは第7期の学習会がスタートしている。第1回目の参加者は14名であった。3月末までの年度内に行われた内容は上記のとおりであり、ディスカッションに続いてすでに模擬授業も行われている。

最後に教職学習会の成果と問題点とを整理し、今後の課題を明らかにしておきたい。

①教員就職者の増加 … 90年代の後半から10年以上にわたって本学では教員採用試験に現役合格するものは皆無であった。また、既卒者を含めてもその数はごくわずかであった。この学習会においてもすぐに目に見えた結果を出すことはできなかったが、2009年度卒業の5期生、そして続く6期生において複数の現役合格者を出すことができた。また、この時期以降に既卒者の合格も続き、学習会出身で公立学校の正教員は現時点で11名を数える（2011年度からの採用者を含む）。公・私立の中学校・高等学校での専任・非常

勤講師や塾・専門学校の講師（正職員）を含めると40名以上のメンバーがすでに教職に就いている。これは彼ら自身の努力の結果であることはいうまでもないが、そのプロセスで学習会におけるさまざまな活動や人間関係が大きな力となったというのが彼ら自身の評価である。

②メンバー相互の交流 … 1期生は当然のことながら直接の先輩はいなかったが、第2期以降、4年生と3年生あるいは教職についている卒業生と現役メンバーとのかかわりが徐々に形作られてきた。関西圏在住の卒業生がディスカッションや模擬授業あるいは懇親会などに顔を出してアドバイスをする一方で、全国で教職に就いている卒業生が失敗談も含めた自分たちの経験や情報をメールのやり取りや掲示板などを通して伝えている。学生にとっては、自分たちの先輩でもある現役教員から学ぶことは非常に大きな意味があり、現役教員にとっては、ホームグラウンドともいえる教職学習会での後輩たちの活動は初心を思い起こさせてくれる刺激となっているようである。

③ディスカッションと模擬授業とのバランス … 第3期以降、ディスカッションと並ぶ学習会活動の柱として模擬授業が取り入れられた。授業実践力が教師の最大の課題であるといえることから考えても、これは重要な活動だろう（その意味で、模擬授業を実施することができなかった第1期、第2期のメンバーへの対応は不十分であったといわざるを得ない）。とくに最近は参加者が増加し、また目の前に迫った教育実習への不安もあって模擬授業の回数を増やす傾向にある。その結果として、ディスカッションの回数がこれまでと比べて少なくなっている。教育に関するさまざまなテーマについて考察し、他のメンバーと意見を交わすことは、教員にとって必要な思考力やコミュニケーション力を養うことにつながっていく。その機会が少なくなってしまった現状にどう対応していくかは検討課題といえる。第4期以降に始まった自主的な読書会をさらに本格化させていくことは、この課題に対する一つの鍵となる可能性があるだろう。

④参加の継続の問題 … すでに確認したように、年度によって多少のばらつきはあるものの本学では毎年30人前後の学生が教員採用試験を受験する。第3期から行っている学習会の説明会にも採用試験受験予定の大半が出席をし、そのうち7～8割の学生が第1回目の学習会に参加する。しかしながら、教育実習後の採用試験が行われる7月頃まで継続的に学習会に参加し続ける者は半数程度である。クラブやアルバイトなどが多忙で出席できない、1～2回サボってしまい参加しづらくなったなどそれぞれに理由はあり、こちらから可能な範囲で声をかけることもあるが、これはあくまでも自主的な学習会であ

り強制すべきものでもない。では、学習会に顔を出さなくなった学生たちはどうしているのか。たとえば、京都市教育委員会が実施している「京都教師塾」などへの参加や教員採用試験のための予備校、あるいは自主的な学習会などの機会を得て準備を進めているのであれば問題はない（私との相性も当然あるだろうし）。しかし、そういった例はごく少数で、個人では対応が困難なディスカッションや模擬授業、集団面接や場面指導などへの準備も十分には行わないまま、多くが試験へと臨んでいるようだ。その結果として、本学での昨年度および今年度の採用試験現役合格者はすべて学習会へ参加し続けた者であり、最近の既卒の合格者もほとんどが同様であった。そういう点からも、学習会への参加を継続させる工夫をメンバーとともに考えていく必要があるだろう。

⑤自主的組織運営… 1期生が学習会を立ち上げ、3期生が模擬授業を開始し、それぞれの学年ごとに活動上の工夫を重ねてきている。そうすることで、ある程度の方法論が学習会の中で積み上げられてきた。このこと自体は大いに評価できる。しかしその反面、期を重ねるにつれて「教職学習会に入れば何かやってくれるだろう」と受動的に考える傾向が現れてきたように感じている。学習会を主宰しているのは形式的には私（中戸）だが、当然のことながら中心となって進めていくのは教員を目指す各メンバーでなければならない。あくまで私はその環境を整える役割を担っているに過ぎない。これに関しては②でも述べたように、先輩たちからの指導を含めた自主的な学習会運営が進められていくように見守りつづけることが必要であろう[2]。また、教員となったメンバー同士の交流や自主的な相互研修も互いの支えとなるはずである。

以上、学習会の成果と問題点、そして今後の課題について述べてきた。しかしながら、教職を目指す学生にとってまず基礎となるべきは教職課程のカリキュラムである。その意味からも自分の授業実践を振り返り[3]、他大学の教職課程での意欲的な実践事例[1]なども参考にしながら、私自身が担当する教職課程の授業研究、そして授業改善を進めていく必要があるはこというまでもない。

また、教職課程の正規のカリキュラムではない教職学習会を運営していくことは、正直なところ私にとって時間的にも労力的にもかなりの負担である。しかし同時に、それぞれが教師へそして大人へと成長していく彼らの姿が私に与えてくれるものは大きい。小中高の現場で教壇に立つ彼らの考えや行動からは、同じ教師として刺激を与えられることも少なくない。教職学習会での活動を通して、周囲の人たちの力も借りながら[5]、今後も彼らの伴走者であり続けることができればと願っている。

註

(1) 中戸義雄「教職課程教育の実践と今後の課題 ―大学生の大人学としての可能性―」（平野正久編『教育人間学の展開』北樹出版　2009年 所収）を参照。

(2) 筆者の大学時代の先輩である大学教員も教職課程において同様の学習会を組織している。その会では教員の関与が最小限にとどめられ、多くが学生自身の手による自主的運営が進められている。筆者がそれに対して羨ましい旨の発言をしたところ、「中戸、こうなるまで10年は辛抱しないとなあ」という言葉が返ってきた。まだまだ時間が必要であるようだ。

(3) 私自身が初めて職課程の授業を担当した際の授業実践については、以下で総括的な検討を行ったことがある。
中戸義雄「大学授業実践ノート」（『大阪大学人間科学部紀要 第25巻』大阪大学人間科学部 1999年）

(4) 阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会編『教師を育てる ―大学教職課程の授業研究―』ナカニシヤ出版 2010年などを参照。

(5) この学習会が曲がりなりにも7年間継続することができたのは、多くの本学教職員からのご理解、ご支援があったからこそである。とりわけ、学生支援センター（教務担当）の山本美紀子課長、教職担当の森太郎氏、嘉納晋司氏、ならびにキャリアセンターの前田香那子氏に対してはとくに感謝を申し上げたい。